

特集：日本人の結婚と出産（その2）

## 晩婚化と未婚者のライフスタイル

岩 間 暁 子

本稿は、晩婚化の社会的背景を解明するために、未婚者のライフスタイル分化に着目し、ライフスタイルパターンによって「結婚相手に望む条件」や「結婚意欲」がどのように異なるのか、という問題について男女別に検討をおこなう。第11回出生動向基本調査（独身調査）の未婚者を対象とする計量分析の結果、ライフスタイルパターンは性別によって異なることが確認され、このようなライフスタイル分化は、「結婚相手に望む条件」や「結婚意欲」に違いを生み出していることが明らかになった。

「結婚意欲」に及ぼすライフスタイルの効果は性別によって異なり、仕事と私生活の両面が充実したライフスタイルの確立は、男性の場合には結婚意欲を高めるが、女性の場合には逆に低める要因となる。また、職業や学歴、収入という社会経済的地位は、依然として男性の結婚意欲を規定する重要な要因であるのに対し、女性の場合にはむしろライフスタイルがより強い影響力を持つという点でも性差が見られる。

これらの知見は、性別役割分業を前提とする社会システムの中では性別によって形は異なるものの、男性にとっても女性にとっても結婚コストが高いという現実をあらわしており、ジェンダー・フリーな社会システムへ転換する必要性を示している。

### 問題の所在

「結婚」の位置が、「人生において誰もがしなければならないもの」から個人の「選択」へと変化しつつある中で、結婚生活に理想を求め、結婚相手の条件にこだわりをもつ傾向が強まっている。このことは、1997年に実施された第11回出生動向基本調査（独身調査）でも確認されている。「ある程度の年齢までには結婚するつもり」という「適齢期意識」は男女共に弱まり、「理想的な相手がみつかるまでは結婚しなくてもかまわない」と考える人の割合が今回の調査で初めて過半数となっている（国立社会保障・人口問題研究所、1999：p.16）。

このような結婚に対する意識の変化は、現実の社会変化と呼応しあいながら進展してきた。特に、男女雇用機会均等法が施行されてからのこの十数年間の変化は大きいと言えるだろう。依然として様々な面で男女格差は存在するものの、新卒の未婚女性の就業機会は拡大し、やりがいのある仕事につき男性と同水準の賃金を手にする女性の数は確実に増えてきた。そして、職業的経済的自立を基盤として、趣味や消費生活、交際など様々な面にお

ける選択肢も広がってきた。

しかしながら、職場や学校などの「公的領域」では性別に基づく不平等を是正する様々な制度が整備されてきた一方、家庭を中心とする「私的領域」に目を向けてみると、相変わらず「性別役割分業」が維持されている。各種の調査結果によって明らかにされているように、結婚後に女性を待ち受けているのは家事労働であり、出産後にはさらに育児・子育てが加わる（日本労働研究機構、1995；厚生省人口問題研究所、1996；横浜市企画局少子・高齢化社会対策室、1998）。このような現実、未婚男女を対象とした日本、韓国、アメリカの3ヶ国比較研究によって示されているように、日本の女性は結婚後の生活水準や自由さに関するマイナスイメージが最も強いという状況を生み出している（Inoue, 1998）。

結婚は男性にとっても女性にとっても人生における大きなライフイベントの一つであり、「ライフスタイル」を変える契機となりうるが、性別役割分業を前提としてきた日本の社会システムの中では、それまでに築いてきたライフスタイルの転換を迫る力は、女性に対してより大きい。女性たちの多くは結婚によって家事や育児を中心に据えたライフスタイルに移行すること、少なくともいずれは移行する決意を持つことが期待されている。

選択肢の拡大を背景として、それぞれの価値観を反映したライフスタイルをある程度確立してきた女性たちにとって、結婚後もそのライフスタイルを継続できる配偶者や結婚生活を希望する気持ちは強いと考えられる。しかし、結婚・出産によって生活を大きく変える現実、「現在のライフスタイルを転換して結婚をするのか」、という難しい決断を女性たちに迫っているのではないだろうか。

以上のように、未婚者が結婚を考えるにあたってライフスタイルは重要な意味を持つと考えられる。そこで、本稿ではライフスタイルに着目し、その分化が未婚者の結婚に対する態度にどのような影響を及ぼしているのか、を検討する。まず最初に、晩婚化現象におけるライフスタイル概念の重要性について論じた上で、(1) 未婚者のライフスタイルはどのように分化しているのか、(2) ライフスタイルの違いは結婚相手に望む条件や結婚意欲とどのように結びついているのか、という二つの課題を中心に、男女別に分析を進める。

### 晩婚化現象におけるライフスタイルの重要性

本稿では、一定の構造的制約の下で、個人が実際の生活の営みとして実現している選好パターンを「ライフスタイル」と定義する。ライフスタイルの分化をとらえるには様々なアプローチがありうるが、ここでは個人が置かれている社会経済的状況と関連づけながら検討するため、各人が保有している資源の保有量とその配分パターンに焦点をあてる。資源の中には所得や財産などに関わる「経済的資源」、社会関係の広がりなどの「関係資源」、職業上の地位や昇進の可能性などの「社会的資源」、「時間資源」などが含まれる。

ライフスタイルは個人の「価値観」によって方向づけられる一方、実際にその価値観を具体化するプロセスにおいては、各人が社会の中で占めている位置、特に、所有している

資源の種類や量によって規定される側面が大きい。価値観そのものが過去の経験や現在の社会構造上の位置によってかなりの程度影響を受けているため、社会経済的資源はライフスタイル分化において重要な役割を果たしていると考えられる。

このように個人の価値観および保有する資源が総体として顕在化したものとしてライフスタイルを定義することにより、価値観や志向性ではとらえきれない「構造的制約」という諸条件を検討することが可能になるが、さらに、「過去 - 現在 - 未来」という時間軸の流れの中で個人の行動が選択・規定されている側面についても明らかにすることができる。過去の経験や現在の諸条件によって制約されながら形成されたライフスタイルは、将来にわたる個人の様々な選択に対しても一定の拘束力を持つと考えられる。本稿で扱う晩婚化現象に即して考えてみると、例えば、結婚前のライフスタイルが望ましいものと感じられているほどそれを継続できる結婚相手の出現を待たせようし、それが現実には困難であれば、結婚そのものをやめるか、あるいはライフスタイルの転換を見据えつつ結婚を選択することになるだろう。日本で進行中の晩婚化現象には1980年代以降の女性役割に関する価値観の急激な変化が関係している、という指摘が既になされているが（阿藤, 1997）、ライフスタイルに着目することにより、結婚行動に対する社会経済的諸要因の影響を時間的経過の中で明らかにすることが可能となる。

現代社会では、ライフスタイルがアイデンティティの源泉になるという意味において、その重要性を増しているが（Giddens, 1991 ; Chaney, 1996）、その背景には、「選択肢の拡大」、「個人主義の高まり」という一連の社会変化がある。確かに、晩婚化も未婚者にとっての選択肢の拡大によって生じた現象ではあるが、他方で、個人の選択を可能とする社会的諸条件が未整備であることによる帰結でもある。性別役割分業システムが依然として強固であり、また、結婚観や家族観の流動化に見合う、新たなそして多様な結婚モデルや家族モデルが社会的コンセンサスを得る形では未だ登場していない、という状況の中で進行していることを見逃してはならないだろう。

個人の行動を説明する上でライフスタイルが重要性を増してきたその他の背景としては、経済のサービス化による職業構造の変化も関係していると考えられる。第三次産業の拡大と共にブルーカラーが減少し、ホワイトカラーが増加してきたことにより、ホワイトカラーの中に多様な価値観や意識を持つ層が出現している。特に、女性の場合には昇進可能性の低いホワイトカラーの割合が男性よりも相対的に高く、その中に多様な層が存在していると考えられる。ライフスタイルに着目することは、このような職種内分化をとらえるという点でも有効なアプローチとなるだろう。

## データ

国立社会保障・人口問題研究所によって、1997年6月に全国の年齢18歳～50歳未満の独身男女12,553人を対象に実施された「第11回出生動向基本調査（独身調査）」のデータを用いる。調査方法は留置調査法で、密封回収方式で回収された。有効回収率は74.9%であり、

有効票数は9,407票である。この調査における独身者の定義には、未婚者だけでなく離別者および死別者も含まれるが、未婚者と既に結婚生活を体験した者では結婚に対する意識が大きく異なると考えられるため、本稿の分析は独身者（8,625票、全体の91.7%）を対象とする。なお、標本抽出法などの詳細については報告書を参照のこと（国立社会保障・人口問題研究所、1999）。

## 未婚者のライフスタイル分化の実態

### 1. 「ライフスタイル」概念の操作化

ライフスタイルを測定するために、表1に示す11の質問項目を用いる。それぞれの項目についての選択肢は、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の4段階である。

まず最初に、未婚者のライフスタイル分化を明らかにする上で重要と考えられる社会経済的資源に関して、「仕事」、「趣味」、「消費」、「交際」という4つの領域を取り上げる<sup>1)</sup>。

この他に、個人が保有する資源とは異なる形で結婚に関する選択を方向づけている重要な側面として、「個人主義志向」を取り上げる。個人主義的ライフ

スタイルを求める傾向が強ければ、共同生活を前提とする結婚に対してより消極的な態度を持つことが予想される。

これらの中には「仕事」に関する項目が含まれているため、「学生」、「無職」の未婚者は以下の分析から除かれることになる。また、有職者のうち「農林漁業従事者」は男女共に約0.5%と代表性が低いいため分析から除く。したがって、以下の分析対象は農林漁業以外の職業に従事する未婚者となる。

男女別の回答結果をパーセントで示したのが表2、表3である。分析に先立ち、男女別に全体的な傾向を確認しておきたい。

まず最初に「仕事」に関してみると、今後何らかの達成を期待できる割合は女性よりも男性で高いことがわかる。このことを反映する形で、仕事にやりがいを感じていたり、仕

表1 ライフスタイルの測定

		質 問 項 目
社会 経済 的 資源	仕 事	仕事にやりがいを感じている 今の仕事で昇進したり、事業で成功する見込みは高い 仕事のために、私生活を犠牲にすることがよくある
	趣 味	生きがいとなるような趣味やライフワークを持っている
	消 費	仕事以外で、国内旅行や海外旅行によく出かける 衣服や持ちものには、こだわりが強い方だ 欲しいものを買ったり、好きなことに使えるお金が少ない
	交 際	気軽に一緒に遊べる友人が多い 異性の友人は多い方だ
志向	個人主義	一人では休日や自由時間をもてあましてしまうことが多い 一人の生活を続けても寂しくないと思う

1) 調査票に含めることができる質問数には一定の量的制約があり、これらの項目が未婚者のライフスタイルを必ずしも網羅しているわけではなく、また、領域によって取り上げることができた項目数にもばらつきはあるが、結婚に関する意識や結婚意欲との関連を検討する上で欠かせない側面を取り上げるように考慮しながら作成にあたった。

表2 ライフスタイル項目の単純集計 (男性：%)

	あてはまらない	どちらかと言え あてはまらない	どちらかと言え あてはまる	あてはまる
a. 仕事以外で、国内旅行や海外旅行によく出かける	56.2	21.5	15.0	7.3
b. 衣服や持ちものには、こだわりが強い方だ	26.0	27.3	26.6	20.0
c. 欲しいものを買ったり、好きなことに使えるお金が少ない	15.0	29.8	30.3	24.9
d. 気軽に一緒に遊べる友人が多い	11.0	25.9	35.4	27.7
e. 異性の友人は多い方だ	28.5	40.5	21.6	9.4
f. 生きがいとなるような趣味やライフワークを持っている	12.7	26.1	31.0	30.2
g. 一人では休日や自由時間をもてあましてしまうことが多い	29.1	31.4	26.4	13.1
h. 一人の生活を続けても寂しくないと思う	25.5	34.2	25.7	14.5
i. 仕事にやりがいを感じている	12.1	23.6	39.7	24.5
j. 今の仕事で昇進したり、事業で成功する見込みは高い	21.0	37.1	31.6	10.3
k. 仕事のために、私生活を犠牲にすることがよくある	18.7	28.5	33.0	19.7

表3 ライフスタイル項目の単純集計 (女性：%)

	あてはまらない	どちらかと言え あてはまらない	どちらかと言え あてはまる	あてはまる
a. 仕事以外で、国内旅行や海外旅行によく出かける	41.7	19.8	24.0	14.5
b. 衣服や持ちものには、こだわりが強い方だ	11.9	25.2	38.3	24.6
c. 欲しいものを買ったり、好きなことに使えるお金が少ない	12.6	34.1	30.9	22.3
d. 気軽に一緒に遊べる友人が多い	7.6	24.9	40.1	27.4
e. 異性の友人は多い方だ	25.7	38.8	24.2	11.3
f. 生きがいとなるような趣味やライフワークを持っている	18.3	33.9	26.5	21.3
g. 一人では休日や自由時間をもてあましてしまうことが多い	33.8	34.8	22.5	8.9
h. 一人の生活を続けても寂しくないと思う	34.6	34.2	19.5	11.8
i. 仕事にやりがいを感じている	14.5	29.7	35.6	20.2
j. 今の仕事で昇進したり、事業で成功する見込みは高い	38.5	39.5	16.3	5.8
k. 仕事のために、私生活を犠牲にすることがよくある	25.2	31.5	28.7	14.6

事のために私生活を犠牲にする傾向は男性の方が強い。また、生きがいとなるような「趣味やライフワーク」を持っている割合も高い。これらのことから、男性は「仕事」と「趣味」に生活の重点が置かれていることがわかる。他方、女性は旅行に出かけたり、衣服や持ち物にこだわるという「消費」に力点がおかれている。「交際」については男女でほと

んど違いが見られない。興味深いのは、「個人主義志向」に関してであり、男性は「1人では時間をもてあましてしまうことが多い」という回答が女性よりもやや多い反面、「一人の生活を続けても寂しくないと思う」という割合も相対的に高い。

以下ではこれらの項目すべてを用いて、男女別にクラスター分析をおこない、ライフスタイルパターンを析出する。なお、選択肢は「あてはまる」が1、「あてはまらない」が4という順序で回答されているが、以下の分析では結果の解釈を容易にするため、数値が大きいほど活動度が高いことを意味するように、c、g以外の項目について選択肢のスコアを逆転させ、「あてはまらない」が1、「あてはまる」が4とする。

## 2. ライフスタイルのクラスター分析

サンプル数が多いという計算上の制約があるため、階層化クラスター分析ではなく、非階層化クラスター分析を用いる。計算は、SASのFASTCLUSプロシジャー（K-means法）でおこなう。非階層化クラスター分析ではあらかじめクラスター数を指定しておく必要がある。最終的にクラスター数をいくつとするのか、に関しては、30種類の基準量が検討された結果、CCC（Cubic Clustering Criterion）が安定した有効性を持つ基準の一つであることが確認されているため（Milligan and Cooper, 1985）、本稿ではCCCを採用する。

それぞれの質問項目のスコアを平均0、分散1に標準化してからクラスター分析をおこない、CCCという統計学的基準と解釈可能性の両方に考慮しながら検討した結果、最終的に男性は4クラスター、女性は5クラスターとなった<sup>2)</sup>。

2) CCCは、最大値が適切と推測されるクラスター数を表し、2以上のスコアが望ましいとされる。また、クラスター数の判定には、X軸にクラスター数、Y軸にCCCの値をグラフ化してそのプロットパターンを検討する必要がある（Sarle, 1983）。サンプル数が少ない場合には、サンプル数の1/10程度までクラスターの数ごとにCCCを求めると望ましいとされているが、ここではサンプル数が多いため、最大25のクラスター数まで男女別にCCCを求めた。

図18、図19に示すように、男女共にCCCの値は2を大きく超えているが、CCCの最大値はクラスター数2のところであり、CCCの基準に従えば、クラスター数は男女共に2となる。

図18 クラスター数とCCC（男性）

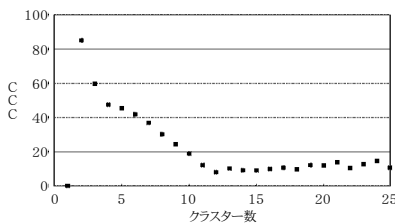
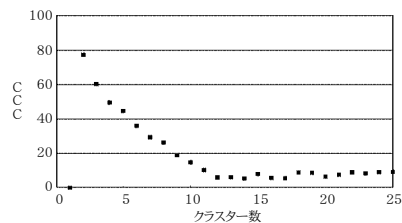


図19 クラスター数とCCC（女性）



しかし、クラスター分析はもともと推測統計というよりも、対象や変数の「分類」を目的として用いられる記述的手法であるため、最終的なクラスター数をいくつとするのか、という問題は、分析目的、研究テーマに関して研究者が持っている情報などに依存する部分が大きい（Romesburg, 1989）。例えば、マーケティング調査では、クラスター数が多すぎると企業の製品開発や営業戦略が煩雑になりすぎる、という実務上の要請のために、クラスター数は10以内に収められることが多い。

本稿の目的は、未婚者のライフスタイル分化と結婚観や結婚意欲の対応関係を検討することにあり、あまりに多すぎるクラスター分類は分析結果の解釈を複雑にしてしまうし、逆に少なすぎても多様な現実を反映することができない。クラスター数2の場合、全ての領域に活発なクラスターと、不活発なクラスターに分かれるにすぎない。また、クラスター数3の場合にも、中間的なクラスターが加わるだけである。CCCが示しているようになるべく少ないクラスター数の中で、活発度に加えてその中身の多様性もとらえることができるように考慮しつつ検討した結果、最終的に、男性は4クラスター、女性は5クラスターとなった。

(1) 男性のライフスタイル分化

男性のライフスタイルは4パターンに分化している。クラスターごとに各項目の平均スコアをグラフにしたのが図1から図4である。スコアは全て標準化してあるため、項目間のスコアを比較することができる。

目盛りは最小 - 1 から最大 +1.5 の範囲であり、全体の面積が外側に広がっているほど活発なライフスタイルであること、あるいは、個人主義志向が強いことを表している。以下では、それぞれのクラスターの特徴について、他のクラスターと比較しながら検討する。

クラスター1は、ほとんどすべての領域について最も多くの資源を保有している点が最大の特徴である。仕事にやりがいを感じ、将来的にもある程度の達成を果たせる見込みが高い一方、消費も活発であり、生きがいとなる趣味を持ち、友人との交際も楽しむという充実したライフスタイルである。

クラスター2は、仕事は低調であり、経済的ゆとりも乏しいが、身だしなみに気を配り、異性も含めた友人交際を中心に据えている点が特徴的である。また、趣味のスコアはクラスター1に次いで高く、全体的にプライベートに力点が置かれている。

クラスター3は、クラスター2と対照的に、生活の中心が仕事にあり、私生活はどの側面に関しても低調である。クラスター3はクラスター1と同程度に仕事で私生活を犠牲にしているが、仕事で成功する可能性は低く、仕事にやりがいを感じていないという点で違

図1 クラスター1 (男性：28.8%)

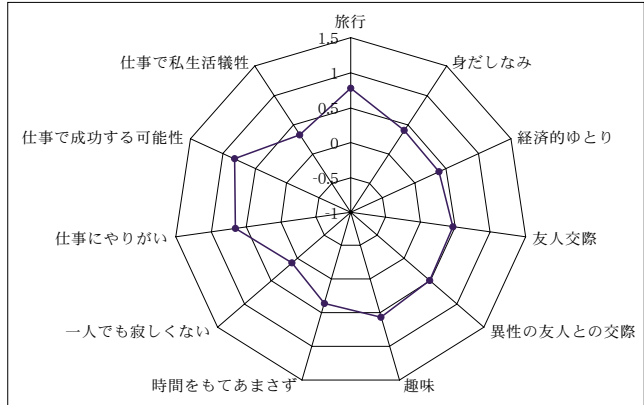


図2 クラスター2 (男性：24.2%)

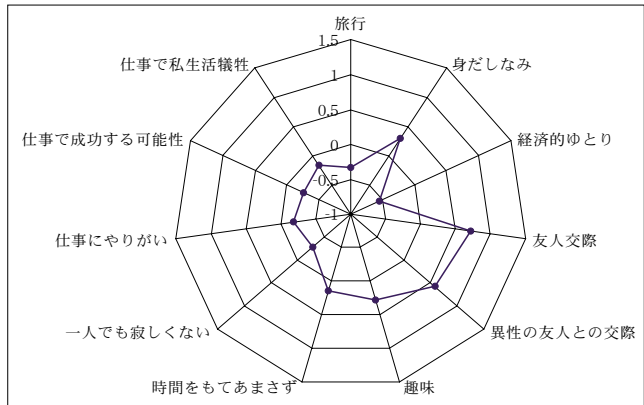
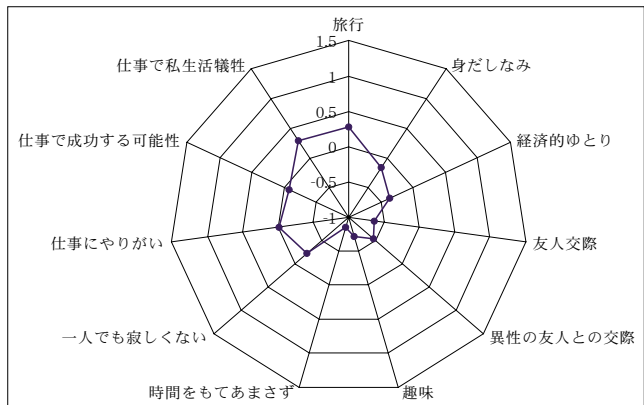


図3 クラスター3 (男性：23.4%)



いが見られる。友人との交際は少なく、趣味も少ない。プライベートの低調さを反映していると考えられるが、「一人では時間を持てあましてしまう」という感覚が最も強い。

クラスター4は、経済的ゆとりは4クラスターの中で最も高い。他のクラスターと比べて特徴的であるのは、仕事や趣味、交際のいずれの側面でも不活発であるにもかかわらず、「一人でも時間をもてあまさない」、「一人の生活を続けても寂しくない」という個人主義的ライフスタイルが身につけている点である。

以上の検討から、クラスター1は「充実型」ライフスタイル、クラスター2は「交際中心型」ライフスタイル、クラスター3は「仕事犠牲型」ライフスタイル、クラスター4は「不活発型」ライフスタイルを表していると考えられる。

(2) 女性のライフスタイル分化

女性のライフスタイルは5パターンに分化している。男性の分析結果と同様に、クラスターごとに各項目の平均スコアをグラフにしたのが図5～図9である。

クラスター1は、クラスター3に次いで仕事に関するスコアが高く、仕事を中心としながら、生きがいとなる趣味も持っているという堅実なライフスタイルである。また、他のクラスターと比べて「一人の生活を続けても寂しくない」と感じている傾向が強い。

クラスター2は、全ての項目についても最もスコアが低い。仕事、趣味、消費、交際のいずれの領域についても不活発であり、また、

図4 クラスター4 (男性：23.6%)

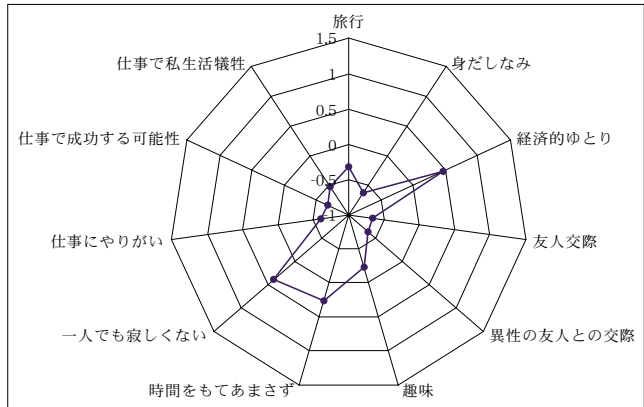


図5 クラスター1 (女性：21.5%)

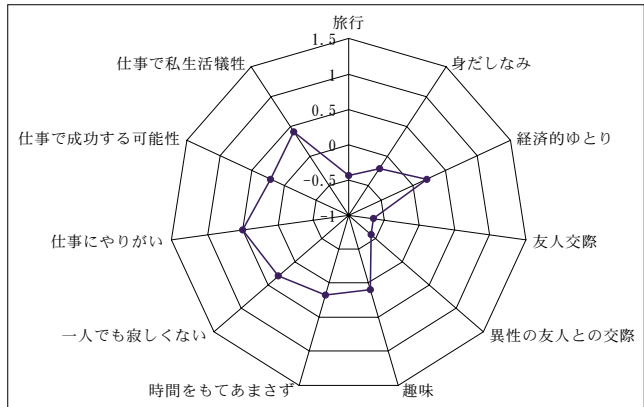
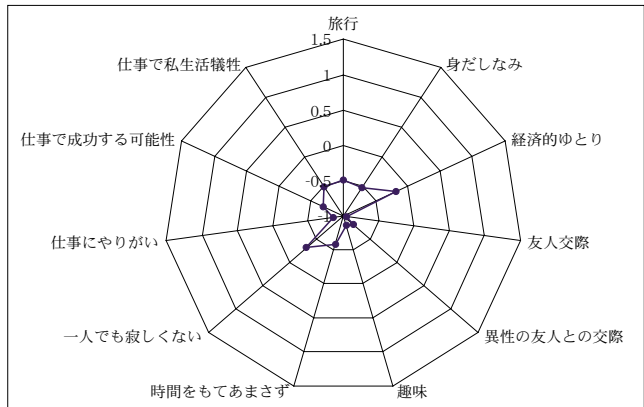


図6 クラスター2 (女性：18.1%)





一人では時間を持て余してしまい、一人の生活を続けることに対して寂しさを感じている。少なくともここで取り上げたライフスタイルに関しては、最も疎外された状況に置かれていると言えるだろう。

クラスター3は、男性のクラスター1と同様に、いずれの領域についても充実している。仕事で私生活を犠牲にする部分も大きいですが、キャリア展望を持ち、仕事にやりがいを感じている。消費、趣味、友人交際という私生活も充実しており、個人主義志向も強い。

クラスター4は、異性の友人も含めた交際を中心とするライフスタイルである。仕事の比重は低く、消費は低調である。一人では時間を持てあましてしまい、また、一人の生活を続けることに寂しさを感じる度合いはクラスター2に次いで高い。

クラスター5は、旅行によく出かけ、身だしなみに気を配り、経済的ゆとりも多いというように消費生活の充実が特徴である。将来的にキャリアを達成できる可能性は低く、仕事にやりがいを感じていないことが背景にあると考えられるが、趣味も充実しており、全体的にプライベートに重きを置いている。

以上の検討から、クラスター1は「堅実型」ライフスタイル、クラスター2は「不活発型」ライフスタイル、クラスター3は「充実型」ライフスタイル、クラスター4は「交際中心型」ライフスタイル、クラスター5は「消費中心型」ライフスタイルを表していると考えられる。

図7 クラスター3 (女性: 18.2%)

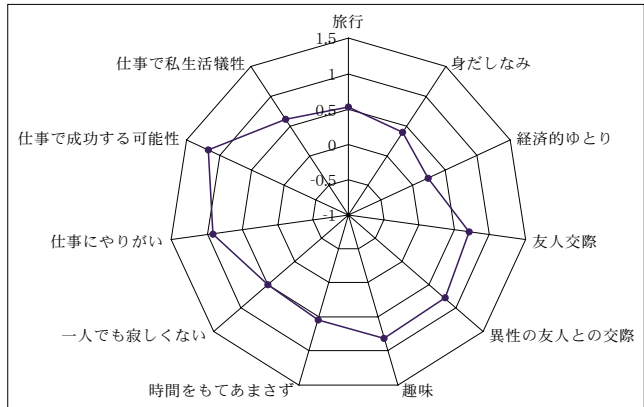


図8 クラスター4 (女性: 19.4%)

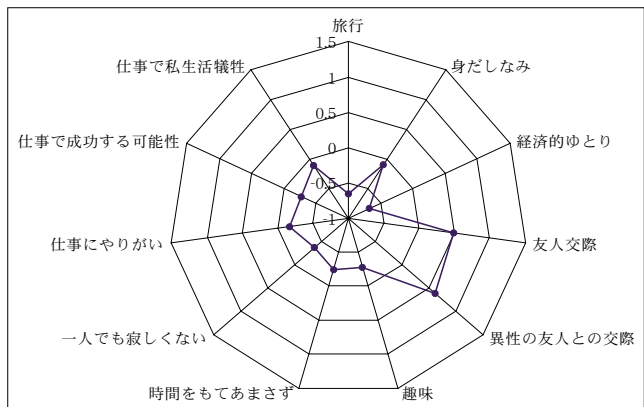
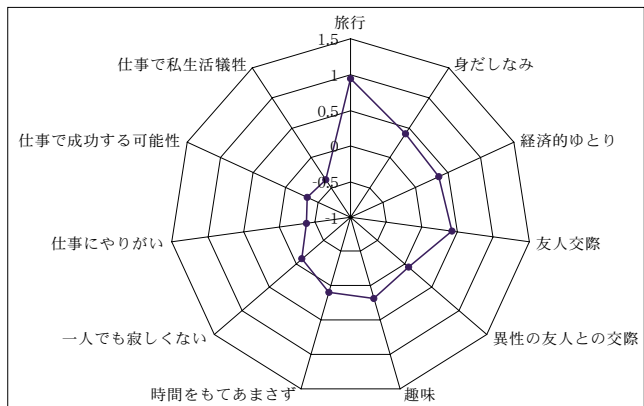


図9 クラスター5 (女性: 22.8%)



男女で共通するライフスタイルは、「充実型」、「交際中心型」、「不活発型」の3つであるが、同じ「不活発型」でも、女性の方が男性よりも経済的ゆとり乏しく、一人の生活を消極的にとらえているという点で違いが見られる。これらの他に、男性の場合には「仕事犠牲型」、女性の場合には「堅実型」および「消費中心型」というパターンがある。

### (3) クラスターの属性

各クラスターはどのような属性の未婚者から構成されているのだろうか。

男性について、職業別、学歴別にクラスター構成を示したのが図10、図11である。自営業では「仕事犠牲型」の割合が最も高い。専門職と事務職についてはほぼ似たような傾向が見られるが、専門職の方が「交際中心型」がやや多く、事務職では「不活発型」がやや多いという違いがある。管理職は「充実型」が4割強を占めている反面、「不活発型」も現場労働に次いで2割強と多い。販売・サービス職は、人と接する仕事であることが関係しているのだろうか、「交際中心型」が約3割を占めている。現場労働では「充実型」の割合が

図10 職業別のクラスター構成 (男性)

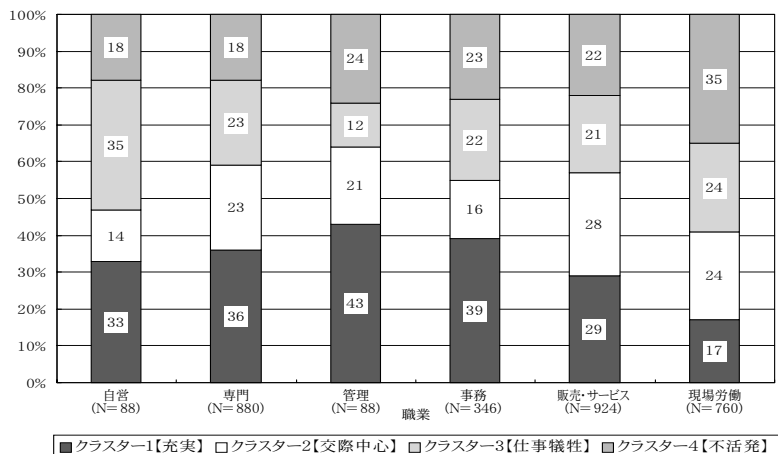
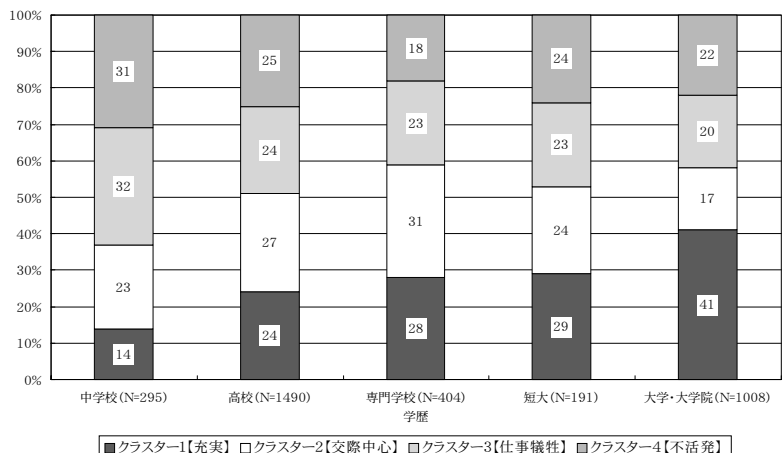


図11 学歴別のクラスター構成 (男性)



最も低く、「不活発型」が最も多い。職業とライフスタイルの間にはある程度の対応関係が見られるものの、同じ職種の中に多様なライフスタイルが存在しているのも確かである。

学歴との関連を見ると、「充実型」は高学歴になるほど増加し、大卒・大学院卒では中卒の約3倍も多い。中卒では「仕事犠牲型」と「不活発型」が6割強を占めている。高卒では4つのライフスタイルパターンがほぼ同じ割合で存在している。

年齢階層別に見ると（図12）、20代前半までは「交際中心型」が最も多いものの次第に減少し、逆に、「不活発型」は年齢と共に増加している。「仕事犠牲型」はいずれの年齢階層においても、2割程度存在している。「充実型」は30代前半で最も多い。

女性の場合、自営業と管理職のサンプル数が少ないために、それぞれの職種の代表性は低いが、限られた範囲で考察をおこなう（図13）。仕事と私生活の両面が充実した「充実型」と「堅実型」の割合は管理職と専門職で高く、両方を合計するとそれぞれ7割強、6割弱を占めている。なお、管理職では「交際中心型」が0のため、グラフでは表示されていない。

図12 年齢階層別のクラスター構成（男性）

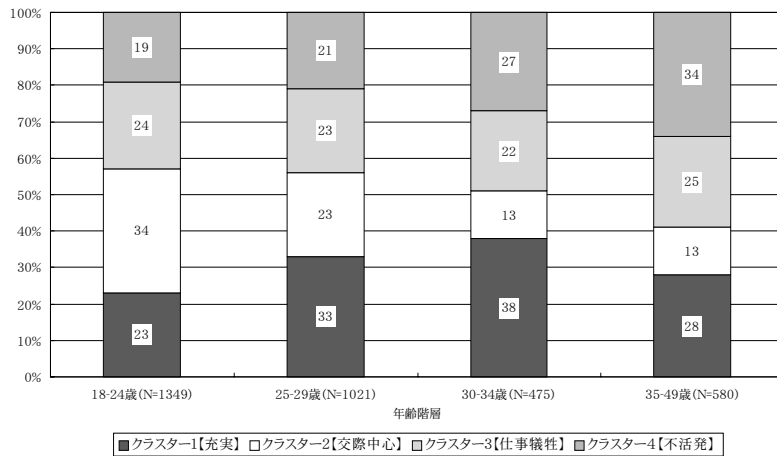
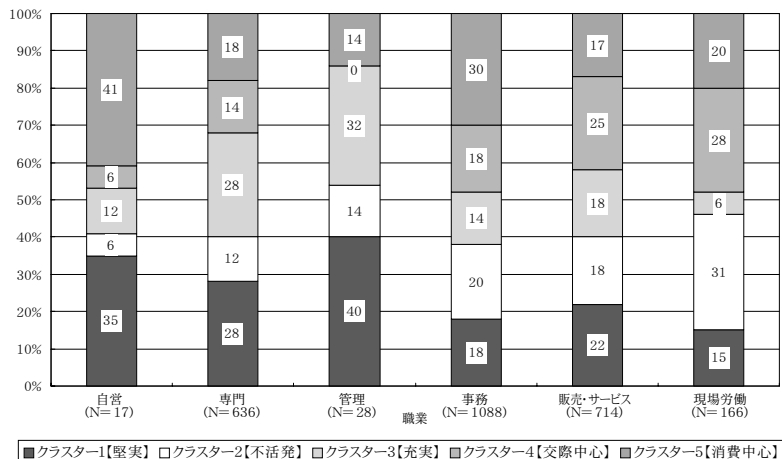


図13 職業別のクラスター構成（女性）



い。「消費中心型」の割合は自営業と事務職で高い。販売・サービス職、現場労働では「交際中心型」が多いが、現場労働では男性と同様に「不活発型」が最も多い。

学歴との関連については（図14）、「堅実型」はどの学歴にも2割程度存在している。「不活発型」は学歴が高くなるほど減少している。男性と同様に「充実型」が最も多いのは大卒・大学院卒であるが、専門学校卒がそれに続く。興味深いのは、専門学校卒と短大卒の違いである。専門学校卒の場合には「充実型」が最も多いのに対し、短大卒では「消費中心型」が最も多い。いずれも2年間の修学年数であるが、その後のライフスタイルパターンには違いが見られる。「交際中心型」は中卒、高卒で多い。

年齢との関連については（図15）、20代前半までは「交際中心型」が最も多いが年齢と共に減少していく、という男性と同じ傾向が見られる。しかし、男性では「不活発型」が年齢と共に増えているが、女性の場合にはそのような傾向は見られず、むしろ、「堅実型」と「充実型」が増加する。また、「消費中心型」は20代後半から30代前半にかけて多い。

図14 学歴別のクラスター構成（女性）

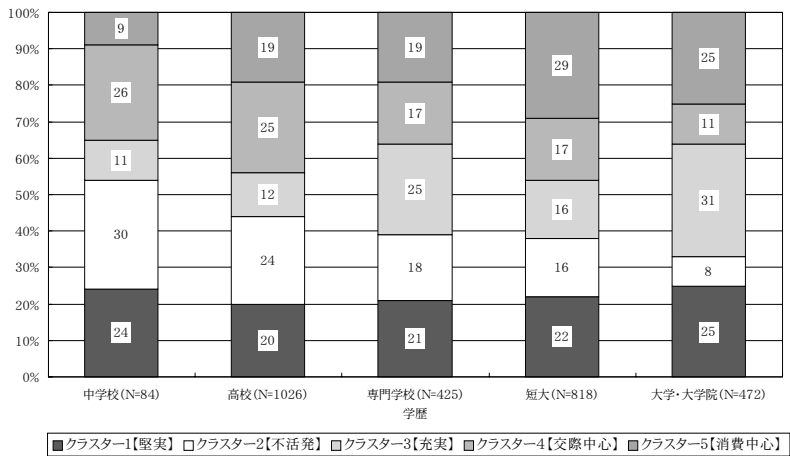
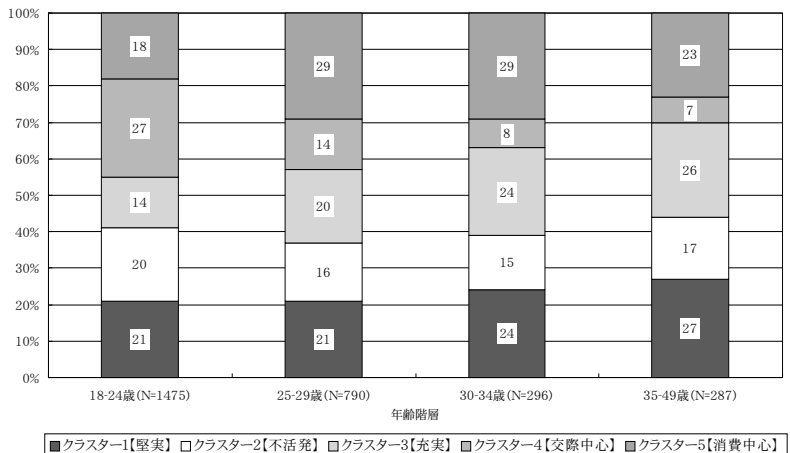


図15 年齢階層別のクラスター構成（女性）



## ライフスタイルと結婚相手の条件

ライフスタイルの違いによって、結婚相手に望む条件はどのように異なるのだろうか。調査票では「あなたは結婚相手を決めるとき、次のことについてどの程度重視しますか」という質問に「重視する」、「考慮する」、「あまり関係ない」の3段階で回答を求めているので、順に3点、2点、1点を与え、男女別に平均値を計算した結果が表4と表5である。全般的には、男女共に結婚相手に望む条件は「充実型」で最も厳しく、「不活発型」でこ

表4 クラスタ別々の結婚相手の条件（男性）

	クラスター1 【充実】	クラスター2 【交際中心】	クラスター3 【仕事犠牲】	クラスター4 【不活発】
人から***	2.86	2.80	2.75	2.74
学歴***	1.35	1.20	1.21	1.21
職業***	1.45	1.35	1.37	1.30
収入などの経済力*	1.35	1.36	1.31	1.29
自分の仕事に対する理解と協力***	2.47	2.29	2.27	2.09
家事・育児に対する相手の役割***	2.30	2.25	2.23	2.15
共通の趣味***	2.03	1.97	1.84	1.79
相手の容姿***	1.97	1.92	1.89	1.85
相手の親との同居	1.73	1.68	1.71	1.70
自分の親との同居	1.80	1.75	1.77	1.74

注) \*\*\*は1%水準で有意、\*は10%水準で有意

表5 クラスタ別々の結婚相手の条件（女性）

	クラスター1 【堅実】	クラスター2 【不活発】	クラスター3 【充実】	クラスター4 【交際中心】	クラスター5 【消費中心】
人から**	2.90	2.90	2.94	2.90	2.95
学歴***	1.60	1.44	1.67	1.43	1.69
職業***	2.01	1.92	2.05	1.93	2.04
収入などの経済力	2.26	2.21	2.30	2.26	2.28
自分の仕事に対する理解と協力***	2.37	2.08	2.57	2.29	2.21
家事・育児に対する相手の役割	2.34	2.29	2.38	2.29	2.30
共通の趣味***	2.03	1.98	2.21	2.04	2.23
相手の容姿	1.81	1.81	1.84	1.76	1.83
相手の親との同居**	2.14	2.19	2.09	2.08	2.20
自分の親との同居	1.82	1.82	1.77	1.77	1.82

注) \*\*\*は1%水準で有意、\*\*は5%水準で有意

だわりが最も少ないという傾向が見られる。「充実型」ライフスタイルを確立している男性の場合、「自分の仕事に対する理解と協力」と共に「家事・育児に対する相手の役割」もかなり重視するが、女性の場合には「家事・育児に対する相手の役割」よりも「自分の仕事に対する理解と協力」を求めている。また、仕事に比重を置く「堅実型」も、「自分の仕事に対する理解と協力」を重視している。女性では、「充実型」と並んで「消費中心型」も結婚相手に高い理想を求める傾向が強いが、「自分の仕事に対する理解や協力」よりも、「学歴」や「職業」、「相手の親との同居」を重視していることから、「夫は経済責任、妻は家庭責任」という性別役割分業を前提に考えている傾向がうかがえる。

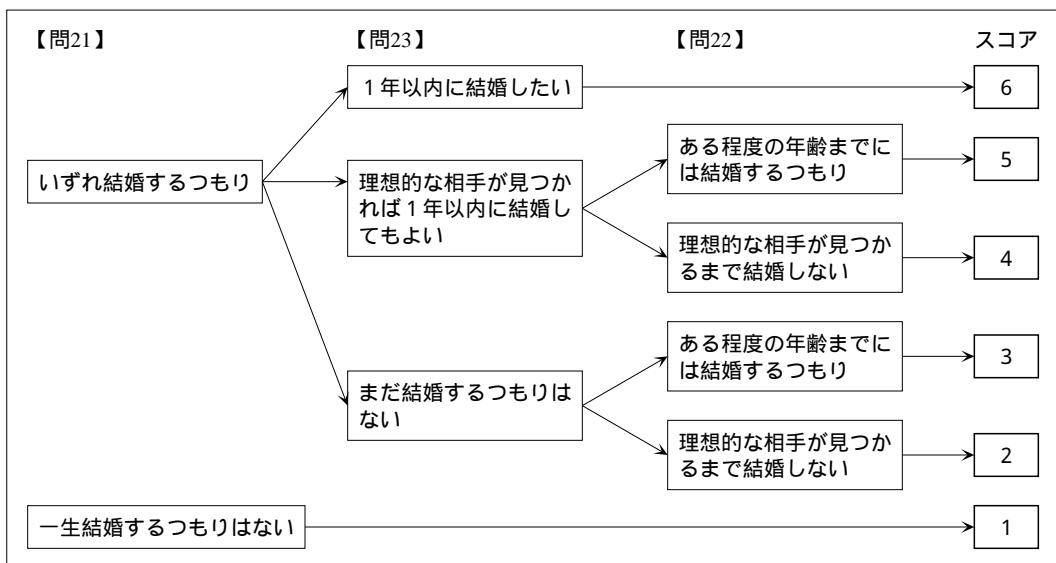
## ライフスタイルと結婚意欲

### 1. 「結婚意欲」の操作化

以下では、未婚者の「結婚意欲」について検討する。報告書では「結婚からの心理的距離」として操作化されているスコア（国立社会保障・人口問題研究所、1999：1章）の方向を逆転し、大きな値ほど「結婚したい」という気持ちが強いことを表すように変更したスコアを用いる。具体的には、結婚に対する考え方を尋ねた複数の質問（問21、問22、問23）の回答を組み合わせ、図16に示す手順で数量化する。

まず最初に、問21で一生を通じての結婚に対する考え方について「一生結婚するつもりはない」と回答した人に1を与え、「いずれ結婚するつもり」と回答した人を次の操作にしたがって2～6のいずれかを与える。問23の1年以内の結婚に対する考え方について、無条件に「1年以内に結婚したい」と回答した場合には6、「理想的な相手が見つければ1年以内に結婚してもよい」と回答した場合には4、「理想的な相手が見つかるまで結婚しない」と回答した場合には2と設定する。

図16 「結婚意欲」の測定

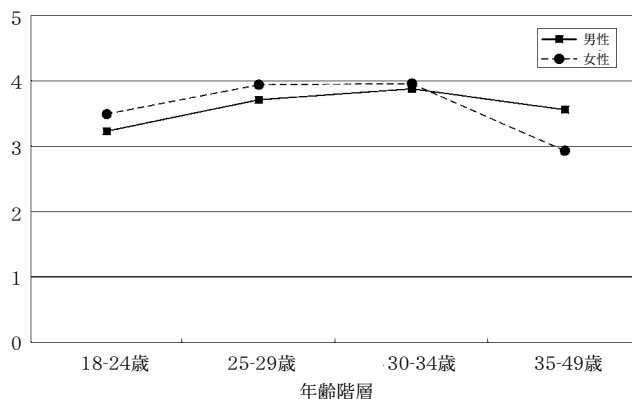


るつもり」と答えた人に5、「理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」と答えた人に4を与える。そして、問23で「まだ結婚するつもりはない」と回答した人のうち、問22で「ある程度の年齢までには結婚するつもり」と答えた人に3、「理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」と答えた人に2を与える。

## 2. 年齢と結婚意欲の推移

年齢と共に結婚意欲はどのように変化するのだろうか(図17)。興味深いのは、晩婚化の進展を受けて、30代前半の結婚意欲は20代後半とほぼ同水準に保たれている点である。また、女性の結婚意欲の水準は30代前半までは男性よりも高いものの、35歳以降に急激に低下するのに対し、男性の場合は20代前半よりも高い結婚意欲が維持されている。

図17 年齢階層と結婚意欲



## 3. 結婚意欲の規定要因

これまでの検討によって、ライフスタイルによって結婚相手に望む条件には違いが見られ、また、結婚意欲は年齢と共に変化していることが明らかになった。そこで、結婚意欲にライフスタイルがどのような影響を及ぼしているのか、という問題について、年齢階層別に重回帰分析を用いて検討する<sup>3)</sup>。

ライフスタイルについては、「不活発型」を基準とするダミー変数とする。職業については「事務職」を基準とするダミー変数とし、学歴については教育年数を用いる。その他のコントロール変数として、「人口集中地域に居住しているか否か」、「親と同居しているか否か」、「年収」、「伝統的家族観」の4変数をモデルに含める。結婚に理想を求める傾向が強まっている中、家族の在り方に関わる価値観は、結婚意欲においても重要な位置を占められていると考えられる<sup>4)</sup>。各変数の操作化については表6を参照。

3) 年齢階層別の分析に先立ち、全ての年齢層を対象に説明変数の一つとして年齢を含めたモデルを男女別に検討したが、モデルの説明力は極めて低かったため、年齢階層別に分析を進めた。この結果は、年齢によって結婚意欲を規定するメカニズムはかなり異なり、結婚意欲に対して年齢の線型効果を仮定するのは無理があることを示していると考えられる。

4) 価値観の項目はこの他に「結婚前の男女でも愛情があるなら性交渉を持ってかまわない」、「結婚しても、人生には結婚相手や家族とは別の自分だけの目標を持つべきである」、「恋愛と結婚は別である」という3つがあり、これらを含めた9項目で因子分析(バリマックス回転)をおこなうと、男女共に、固有値1を超える因子が二つ得られた。第一因子には表6に示す6項目の因子負荷量が高く、第二因子は残りの3項目の因子負荷量が高い。第二因子の解釈は難しく、また、二つの因子を同時に重回帰分析に含めたモデルも検討したが有意な効果は得られなかったため、伝統的家族観を表していると考えられる6項目で主成分分析をする方針を採用した。なお、因子パターンは男性で $a=0.57$ ,  $b=0.69$ ,  $c=0.49$ ,  $d=0.67$ ,  $e=0.75$ ,  $f=0.64$ 、女性で $a=0.59$ ,  $b=0.69$ ,  $c=0.56$ ,  $d=0.69$ ,  $e=0.74$ ,  $f=0.64$ である。

表6 説明変数の操作化

人口集中地域	人口集中地域を1, それ以外を0とするダミー変数	
親と同居	同居を1, 非同居を0とするダミー変数	
学歴	教育年数	
年収	1 = 100万円未満 2 = 100万円以上～200万円未満 3 = 200万円以上～300万円未満 4 = 300万円以上～400万円未満	5 = 400万円以上～500万円未満 6 = 500万円以上～600万円未満 7 = 600万円以上～800万円未満 8 = 800万円以上
職業	「事務職を」基準とし, それぞれの該当クラスターを1, それ以外を0とするダミー変数	
ライフスタイル	「不活発型」を基準とし, それぞれの該当クラスターを1, それ以外を0とするダミー変数	
伝統的家族観	<ul style="list-style-type: none"> <li>a. 生涯を独身で過すということは, 望ましい生き方ではない</li> <li>b. 男女と一緒に暮らすなら結婚すべきである</li> <li>c. 結婚したら, 家庭のためには自分の個性や生き方を半分犠牲にするのは当然だ</li> <li>d. 結婚後は, 夫は外で働き, 妻は家庭を守るべきだ</li> <li>e. 結婚したら, 子どもは持つべきだ</li> <li>f. いったん結婚したら, 性格の不一致ぐらいで別れるべきではない</li> </ul> a～fの6項目について主成分分析し, そのスコアを用いる.	

まず最初に男性の分析結果から検討する。ライフスタイルの効果を見ると、「仕事犠牲型」の場合には、結婚にある種の安らぎを求めているのだろうか、どの年齢階層においても結婚意欲は高い。20代後半から30代前半にかけては、「充実型」、「交際中心型」でも結婚意欲が高まる。興味深いのは、年齢階層によって職種のとばす効果が異なる点である。具体的には、結婚意欲は20代前半では現場労働職で高まり、20代後半になると販売・サービス職で高くなり、30代前半では自営業以外の全ての職種で高くなり、専門職では30代後半以降においても高い結婚意欲が維持される。なお、20代のうちは都市に住むことは結婚意欲を低下させる効果がある（女性にはこのような効果は見られない）。また、男性の場合には年齢階層に関わりなく、年収が高いほど結婚意欲が高い。これらの分析結果は、男性が結婚を考える際には、「稼ぎ手役割を果たせるか否か」、が重要な意味を持つことを示していると考えられる。

女性の場合には、男性のように職種や学歴の効果はあまり見られず、むしろライフスタイルの影響が強い。最も興味深いのは「充実型」の効果であり、30代前半までは一貫して結婚意欲が低く、男性とは対照的である。この結果は、仕事もプライベートも充実したライフスタイルを送る女性にとっては、結婚によってそれらを失う可能性が高いと認識されている現実を示しているのではないだろうか。さらに、20代前半までは「充実型」だけではなく、「堅実型」、「交際中心型」のライフスタイルにおいても結婚意欲が低いことから、ある程度活発なライフスタイルを確立している女性たちには、若いうちは結婚を避けようという意識が働いていると考えられる。ライフスタイルの持つこのような効果は、女性にとっては結婚がライフスタイルの転換を迫る側面を有していることを示していると言える。



だろう。また、20代では年収が低いほど結婚意欲も低いという関連が見られることから、若い段階においては経済的ゆとりの乏しさが女性に対しても結婚を妨げる要因として作用

表7 男性の結婚意欲に関する重回帰分析（年齢階層別）

説明変数	18-24歳(N = 1003)	25-29歳(N = 855)	30-34歳(N = 388)	35-49歳(N = 442)
人口集中地域	0.08***	0.10***	0.08	0.07
親と同居	0.00	0.00	0.07	0.08*
学歴	0.01	0.10***	0.11**	0.08
年収	0.10***	0.14***	0.11**	0.14***
自営業	0.02	0.02	0.07	0.01
専門職	0.07	0.04	0.17**	0.14**
管理職	0.03	0.01	0.12**	0.01
販売・サービス職	0.07	0.08*	0.14**	0.08
現場労働職	0.10**	0.04	0.20***	0.05
クラスター1【充実】	0.02	0.17***	0.16***	0.05
クラスター2【交際中心】	0.06	0.14***	0.18***	0.08
クラスター3【仕事犠牲】	0.10***	0.18***	0.17***	0.10*
伝統的家族観	0.21***	0.25***	0.26***	0.31***
F値	6.40***	10.23***	5.54***	6.54***
決定係数	0.08	0.14	0.16	0.17
修正決定係数	(0.07)	(0.12)	(0.13)	(0.14)

注) \*\*\*は1%水準で有意, \*\*は5%水準で有意, \*は10%水準で有意

表8 女性の結婚意欲に関する重回帰分析（年齢階層別）

説明変数	18-24歳(N = 1179)	25-29歳(N = 656)	30-34歳(N = 250)	35-49歳(N = 210)
人口集中地域	0.02	0.06	0.01	0.17
親と同居	0.04	0.02	0.11*	0.18***
学歴	0.04	0.02	0.24***	0.11
年収	0.11***	0.14***	0.05	0.13*
自営業	0.06**	0.08**	0.08	0.02
専門職	0.01	0.02	0.04	0.00
管理職	0.01	0.02	0.03	0.02
販売・サービス職	0.04	0.03	0.11*	0.02
現場労働職	0.02	0.05	0.10	0.14*
クラスター1【堅実】	0.10***	0.07	0.00	0.04
クラスター3【充実】	0.12***	0.14***	0.19**	0.04
クラスター4【交際中心】	0.09**	0.03	0.04	0.16**
クラスター5【消費中心】	0.03	0.00	0.02	0.10
伝統的家族観	0.28***	0.31***	0.20***	0.20***
F値	10.45***	6.96***	3.38***	2.72***
決定係数	0.11	0.13	0.17	0.16
修正決定係数	(0.10)	(0.11)	(0.12)	(0.10)

注) \*\*\*は1%水準で有意, \*\*は5%水準で有意, \*は10%水準で有意

していると考えられる。なお、男女共に、伝統的結婚観を持つ場合には結婚意欲が高い。

## 結論

本稿では、晩婚化が進行している社会的背景を明らかにするために、未婚者のライフスタイル分化の実態を明らかにし、それが結婚相手に望む条件や結婚意欲とどのように関連しているのか、を実証的に検討してきた。明らかになった主な知見は次の5点である。

第一に、性別によってライフスタイルパターンは異なる。クラスター分析の結果、男性の場合には、仕事にも私生活にも積極的な「充実型」、仕事よりも私生活、特に友人交際に重きを置く「交際中心型」、仕事に追われている「仕事犠牲型」、いずれの領域も不活発であるが個人主義志向の強い「不活発型」の4パターンが析出された一方、女性では、仕事と趣味のバランスがとれた「堅実型」、いずれの領域も不活発で孤独感も強い「不活発型」、仕事も私生活も充実した「充実型」、友人交際を中心とする「交際中心型」、仕事よりも消費生活や趣味に関心を寄せる「消費中心型」の5パターンに分化していることが明らかになった。

第二に、このようなライフスタイル分化は、職業や学歴とある程度対応しているものの、中間層を中心として、同じ職種内や学歴内で多様性も見られる。専門職や管理職、高学歴層では「充実型」が多く、現場労働職や低学歴層では「不活発型」が多いという関連性が見られる一方、事務職や販売・サービス職、高卒などの中間層では様々なライフスタイルが存在している。

第三に、ライフスタイルによって結婚相手に望む条件は異なる。男女共に「充実型」では理想が高く、「不活発型」では低い。仕事に意欲的なライフスタイルを確立している男女は「自分の仕事に対する理解と協力」を求めており、結婚後も仕事を重点的に考える傾向が強いが、男性の場合にはさらに「家事・育児に対する相手の役割」も重視している。また、「消費中心型」の女性も結婚相手に望む条件が厳しいが、「充実型」とは異なり、相手の社会経済的地位や親との同居を重視している。

第四に、様々な要因をコントロールした分析の結果、ライフスタイルは結婚意欲に有意な効果を及ぼしており、特に女性の場合には職種よりも強い影響力を持つことが明らかになった。男性の場合には、充実したライフスタイルの実現は結婚意欲を高めるが、女性の場合には逆に、結婚意欲を低下させる。「充実型」の女性が結婚相手に対して仕事に対する理解と協力を求める傾向が強いことを併せて考えると、特に「充実型」の女性にとって、現在の結婚の在り方はライフスタイルの転換を迫るコストの高いものであると言えるだろう。

第五に、社会経済的諸条件の持つ意味は男性にとって依然として大きいことが示されている。結婚意欲は職種によって規定されており、また、経済的ゆとりはどの年齢階層でも結婚意欲を高める効果を持っている。

以上の分析結果から晩婚化とライフスタイルの関連について次の二つの結論を導くこと

ができるだろう。第一に、男性の結婚意欲は職業や収入、学歴に代表される社会経済的地位によってかなり規定されていることから、依然として自らが「稼ぎ手」役割を果たせるか否かを中心に結婚を考える傾向が強いのに対し、女性が理想とする結婚相手の条件はライフスタイルによって分化しており、社会経済的条件のみにこだわりを求める傾向は薄れつつある。特に、キャリア展望をもっている女性たちは、自分の仕事に対する理解や協力を求める傾向が強い。

第二に、結婚の選択にライフスタイルが及ぼす効果は性別によって異なり、充実したライフスタイルの確立は、男性に対しては生活や人生をさらに豊かにするものとして結婚に目を向けさせるが、女性の場合には逆に、結婚は現在のライフスタイルを手放す契機としてとらえられ、結婚を回避する方向に作用している。

未婚者の結婚意欲が30代前半においても20代後半とほぼ同水準であるという知見と併せて総合的に考えるならば、「結婚」そのものが未婚者によって否定されているわけではなく、男性には「稼ぎ手役割」、女性には「家事・育児役割」を強調する社会システムの在り方が結婚コストを高め、結果的に「晩婚化」につながっていると言えるだろう。少子化の最大の要因である晩婚化に対して政策的に対応しようとするならば、性別役割分業を前提とした社会システムからの転換、すなわちジェンダー・フリーな社会システムへの移行が求められている。

## 文 献

- 阿藤誠 (1997) 「日本の超少産化現象と価値観変動仮説」 『人口問題研究』 第53巻第1号, pp.3-20
- Chaney, David. (1996) *Lifestyle*, London, Routledge
- Giddens, Anthony (1991) *Modernity and Self-Identity*, Cambridge, Polity Press
- Inoue, Shunichi (1998) "Family Formation in Japan, South Korea, and the United States: An Overview," Mason, Karen Oppenheimer, Noriko O. Tsuya and Minja Kim Choe (eds.) *The Changing Family in Comparative Perspectives: Asia and the United States*, Honolulu, East-West Center
- 国立社会保障・人口問題研究所 (1998) 『第11回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要』 国立社会保障・人口問題研究所
- 国立社会保障・人口問題研究所 (1999) 『平成9年 第11回出生動向基本調査 - 第 報告書 - 独身青年層の結婚観と子ども観』 国立社会保障・人口問題研究所
- 厚生省人口問題研究所 (1996) 『現代日本の家族に関する意識と実態 - 第1回家庭動向調査 (1993年)』 (財) 厚生統計協会
- Milligan, Glenn W. and Martha C. Cooper (1985) "An Examination of Procedures for Determining the Number of Clusters in a Data Set," *Psychometrika*, 50(2), pp.159-179
- 日本労働研究機構 (1995) 『職業と家庭生活に関する全国調査報告書』 日本労働研究機構
- Romesburg, H. Charles (1989) *Cluster Analysis for Researchers*, Florida, Robert E. Kreiger Publishing Company Inc [西田英郎・佐藤嗣二 (共訳) 『実例クラスター分析』 内田老鶴圃, 1992]
- Sarle, W.S. (1983) *Cubic Clustering Criterion: SAS Technical Report A-108*, Cary, NC: SAS Institute Inc
- 横浜市企画局少子・高齢化社会対策室 (1998) 『結婚に関する市民意識調査 - 少子化の要因分析 - 』 横浜市企画局少子・高齢化社会対策室

# The Postponement of Marriage in Japan and the “Single Lifestyle”

Akiko IWAMA

The postponement of marriage is of strong concern in Japan because of its consequences for fertility. This study focuses on the lifestyle patterns of never-married adults to explain the variation in their attitude toward marriage as well as their desire for marriage, using the 11th Japanese National Fertility Survey, which uses a nationally representative sample conducted by the National Institute of Population and Social Security Research in 1997. To avoid biased results, the analyses are restricted to never-married men and women aged 18-49 who have jobs outside of the primary industries .

The results of cluster analysis show four lifestyle patterns among men and five among women. These lifestyle patterns differentiate the ideal type of spouse; for example, the women having a stronger career-orientation prefer a husband who understands their work situation. Generally, persons who are fulfilled in their public and private life expect a more superior spouse.

Using regression models by sex and cohort, the effects of lifestyle on the desire for marriage are estimated. Men tend to consider themselves to be the breadwinner and their marriage desires depend on their socioeconomic status; the higher the status is, the stronger the marriage desire. The effects of lifestyle are stronger than socioeconomic status among women. In addition, men with a fulfilled life have a stronger desire for marriage, while a fulfilled life is a disincentive to marry among women. These findings indicate that there is a gender difference in the relationship between lifestyle and the desire for marriage and that the perceived costs of marriage are especially high to women who enjoy their lives as singles.